

称号及び氏名	博士(看護学)	野島 敬祐
学位授与の日付	平成28年3月31日	
論文名	救急外来におけるトリアージナースのストレス尺度開発とその信頼性及び妥当性の検討	
論文審査委員	主査	箕持 知恵子
	副査	細田 泰子
	副査	田中 京子
	副査	北村 愛子

論文内容の要旨

【研究目的】

トリアージナースは、救急外来受診患者のトリアージ判定、外来のマネジメント、家族への対応などを一人で行わなければならない、特有のストレスを抱えている。そのストレスを把握し、ストレスを生じさせている環境を改善するための支援へと繋げることは、トリアージナースの疲弊を予防し、適切なトリアージ判断や質の高い看護の提供のためには不可欠である。そのため、本研究では、救急外来におけるトリアージナースのストレス尺度を開発することを目的とする。

【研究方法】

本研究は以下の2段階で進めた。

1. トリアージナースのストレスの実態からの尺度原案の作成（予備研究）

救急外来で勤務するトリアージナース15名にインタビューを実施し、トリアージを行う際のストレス内容を調査した。その結果に基づき、尺度原案を作成した（調査期間：平成25年8月～平成26年4月）。

2. トリアージナースのストレス尺度の信頼性・妥当性の検証（本研究）

本研究1：表面妥当性の検証

尺度開発に精通した看護学研究者1名と臨床経験10年程度のトリアージナース4名で構成された合計5名に対し、フォーカスグループインタビューを実施し、表面妥当性を検証した（調査期間：平成26年7月～8月）。

本研究2：構成概念妥当性・内的一貫性・基準関連妥当性・安定性の検証

全国の救命救急センターで勤務するトリアージナース900名に対し、質問紙を郵送した。調査内容は、研究協力者の属性8項目、トリアージナースのストレス尺度87項目、臨床看護職者のストレス尺度(NJSS)33項目、Stress Response Scacle-18

(SRS-18) の 18 項目の合計 146 項目とした。得られた回答の項目分析、探索的因子分析、既知グループ法により構成概念妥当性を検証した。次に、Cronbach's α 係数により内的一貫性を、NJSS と SRS-18 との相関分析により基準関連妥当性を、再テスト法により安定性を検証した（調査期間：平成 26 年 10 月～12 月）。なお、本研究は、大阪府立大学大学院看護学研究科倫理審査委員会（承認番号 26-24/26-36）の承認を得た。

【結果】

予備研究ではトリアージナースのストレス内容として、トリアージの判断に伴うプレッシャー、周囲のトリアージに対する理解の不足、救急外来の構造や設備、トリアージの困難さ、トリアージに必要な能力の不足、患者や家族への対応、業務に追われる忙しさ、スタッフとの連携不足、トリアージナースへの支援が不十分の 9 つのカテゴリーが抽出され、それに基づき、尺度原案を作成した。

本研究 1 では、類似した質問項目の整理、質問項目と概念の一致、表現の修正を行い、最終的に 87 項目の質問項目とした。本研究 2 では、363 名の回答に基づき、87 項目の因子分析を行った結果、トリアージの能力不足、多忙なトリアージ業務、説明に理解が得られない患者、待たせている患者の訴え、トリアージ能力を高める支援の 5 因子 44 項目で構成されるストレス尺度を作成した。また、既知グループ法により、仮説 1「救急看護師経験年数が 3 年未満の看護師は、3 年以上の看護師よりもストレス得点が高い」は $p=0.043$ 、仮説 2「トリアージナース経験が 1 年未満の看護師は、1 年以上の看護師よりもストレス得点が高い」は $p=0.039$ で共に有意差を認め、支持された。内的一貫性では、Cronbach's α 係数は 0.93 であった。基準関連妥当性では、トリアージナースのストレス得点と SRS-18 との間では $r=.409$ ($p<0.01$)、NJSS との間では $r=.410$ ($p<0.01$) の相関がみられた。安定性では、37 名の回答に基づく再テスト法を行い、1 回目と 2 回目のストレス得点の間で $r=0.457$ ($p<0.01$)、各因子間では $r=0.335\sim 0.518$ の相関がみられた。

【考察】

本尺度は Cronbach's α 係数が高いこと、再テスト法では対象者数の限界があるもののすべての因子間で中程度の相関がみられ、内的一貫性、安定性はある程度確認された。また、因子分析では予備研究で見出されたストレス内容とほぼ一致する 5 因子が抽出され、既知グループ法の仮説が検証されたことで構成概念妥当性確認され、さらに、本尺度と SRS-18、NJSS の総得点は共に正の相関があり、基準関連妥当性が確認された。本尺度の信頼性・妥当性が概ね検証できたと考える。

本尺度は様々な地域や病院のトリアージナースからのインタビューを行い、施設や地域に偏りなく、尺度原案を作成している。トリアージに求められる高い能力や医師の診察の前に患者や家族に問診をする特殊な仕事から生じるストレスに関する内容が含まれている点からも、既存のストレス尺度とは異なり、我が国のトリアージナースのストレ

ッサーの状況を反映した尺度であるといえる。

救急看護師経験年数やトリアージナース経験年数が浅いトリアージナースはストレスをより強く感じており、経験の浅いトリアージナースへの教育方法の検討や評価への活用が急務である。また、トリアージナースのストレスに影響する要因を明らかにし、ストレスを生じさせない支援策を検討することができる考える。

キーワード：トリアージナース ストレス 救急外来

学位論文審査結果の要旨

本研究は日本において導入されて歴史の浅いトリアージシステムを担い、特有のストレスサーを抱えている救急外来におけるトリアージナーズのストレスサー尺度を開発することを目的としている。救急外来におけるトリアージは、診療に必要な医療資源を有効に活用し、患者の生命を守り、患者サービスを向上させるために重要であり、トリアージナーズへの期待は大きい。そのような救急外来におけるトリアージナーズのストレスサーに着目し、評価する尺度を開発した研究は、国内外において貴重であり、本研究の独創性が評価できる。

本研究では救急外来で勤務するトリアージナーズのストレスサーの実態から丁寧に原案を作成し、表面妥当性の検討、構成概念の妥当性、基準関連妥当性、内的一貫性、安定性の検証が行われ、尺度開発の基本的な方法論を用いて、そのプロセスは丁寧に、慎重にすすめられている。安定性については課題が残る部分もあったが、本尺度の信頼性・妥当性が概ね検証できた。

本研究は我が国の救急医療システムやその看護についての現状やストレス理論などに関する丁寧な文献検討と尺度開発の基本的な方法論に基づき忠実に実施されており、論旨も明確で、一貫性がある優れた論文である。

また、本研究により作成された救急外来におけるトリアージナーズのストレスサー尺度は、ストレスサーの実態把握と支援策の検討や評価にその活用が期待できるツールである。教育体制を含め救急外来におけるトリアージナーズのストレスサーを改善し、疲弊を予防して、救急医療の質を担保する支援体制が求められる現状において、本研究はその支援策や評価に関わる意義深い成果をもたらしたといえる。今後、カットオフポイントの設定など尺度の充実により、更なる尺度の活用可能性が期待できる。

以上のことから、本論文は救急看護領域の実践・研究の発展に寄与する博士論文としての価値を有し、学位の授与に値するものと審査員全員一致で認めるものである。